

## ダンにおける魔術意識と神秘意識 (16)

Donne's Magical and Mystical Mentality – 16 –

滝口晴生

Haruo TAKIGUCHI

前回最後に引用した説教には、最終的に神の意志に委ねるという態度が表されていた。この態度は、キリスト自身が示した祈りに模範がある。神に対する信頼の表し方は、キリストの実践に由来するのである。キリストは受難を前にして、弟子たちから離れ、ひとりになって祈る場面が福音書に記述されているが、ダンは説教において何度かこの部分に言及している。ダンはウルガタ聖書を引用しながら説教を行うので、ここの部分のラテン語訳も同時に引用しておく（ラテン語の下線部は、ダンの引用と重なる部分である）。

そのとき、イエスは彼らにいわれた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい。」

それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈っていわれた。「わが父よ。できますならば、この杯を私から過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」（「マタイによる福音書」26章38-9節）

(Tunc ait illis tristis est anima mea usque ad mortem sustinete hic et vigilate mecum / Et progressus pusillum procidit in faciem suam orans et dicens / mi Pater si possibile est transeat a me calix iste / Veruntamen non sicut ego volo sed sicut tu.)<sup>1</sup>

これはすべてのキリスト者にとって模範となる祈りであろう。神に対する恐れを持ち続けること、しかし最後は神への信頼に身をゆだねるというものである。

ダンはこの部分に言及した説教の一つの箇所次のように言う。

For, without this fear, there is no courage, no confidence, no assurance : And therefore Christ begun his Passion with a fear, in his Agony, *Tristis anima*, My soul is heavie; but that fear delivered him over to a present conformity to the will of God, in his *Veruntamen*, yet not my will, but thine be done: And he ended his Passion with a fear, *Eli, Eli, My God, my God, why hast thou forsaken me?* and that fear deliver'd him over to a present assurance, *In manus tuas Domine*, confidently to commend his spirit into his hands, whom he seem'd to be afraid of. (I, 233)<sup>2</sup>

引用の前半は、「マタイによる福音書」26章38-9節への言及である。キリストは恐れとともに受難に向うが、神への委ねの言葉で終わる。後半は十字架上の言葉、マタイの27章46節からの引用である。「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」という「恐れ」の言葉で受難をおえたが、その恐れは「父よ。わが霊を御手にゆだねます」に至ったという。しかしこの最後の引用は、マタイからではなく、「ルカによる福音書」23章46節からの引用である。マタイとルカの記述の違いは次のようになる。

三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」と呼ばれた。これは、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」という意味である。（「マタイ」）

(Et circa horam nonam clamavit Iesus voce magna dicens / Heli Heli lema sabacthani / hoc est Deus meus Deus meus ut quid dereliquisti me.)

イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き

取られた。「ルカ」)

(Et clamans voce magna Iesus ait / Pater in manus tuas commendo spiritum meum.)

つまり、説教の後半の、恐れから委ねへの移行は、「マタイ」から「ルカ」への移行ということになる。同じことをもっと簡潔に、嵐とその沈静に比較しながら説教の別の箇所でも述べている。

At first in the *tristis anima* and *si possibile*, there appeare some gusts, some beginning of a storme, but all becalmed presently in the *veruntamen*, yet not my will, but thy will be done. Soe at first in the *Quare dereliquisti?* there appeares a gust, but in *In Manus tuas*, a calme againe. (II, 162)<sup>3</sup>

つまり「マタイ」では、恐れ of 表明であったものが、「ルカ」では信頼の言葉となっていることである。ダンは「マタイ」と「ルカ」におけるこの部分の言葉は、直接繋がるものと見ているのである。このことは、*Devotions* の最終部分におけるこのキリストの言葉の引用と比較してみるとさらにはっきりしよう。

Thou, O Lord, who hast imprinted all medicinal virtues which are in all creatures, and hast made even the flesh of vipers to assist in cordials, art able to make this present sickness, everlasting health, this weakness, everlasting strength, and this very dejection and faintness of heart, a powerful cordial. When thy blessed Son cried out to thee, *My God, my God, why hast thou forsaken me*, thou didst reach out thy hand to him; but not to deliver his *sad soul* but to receive his *holy soul*: neither did he longer desire to hold it of thee, but to recommend it to thee. I see thine hand upon me now, O Lord, and I ask not why it comes, what it intends; whether thou wilt bid it stay still in this body for some time, or bid it meet thee this day in paradise, I ask not, not in a wish, not in a thought. (Prayer 11; 61)

キリストが「どうして私をお見捨てになったのですか。」といったとき、神は手を差し伸べていたのである。キリストのほうも「魂を拒む」(“hold it of thee”)ことはせず、魂を差し出す、というとき、あきらかにダンは「ルカ」の記述を念頭においていることがわかる。ダンが「マタイ」と「ルカ」を結びつけることによって、キリストの祈りに見ていたものは、恐れを表明することが、神の手を引き寄せ、それに身を委ねる人間側の態度ということであったのである。ダンが最終的に救いの形としてみたのは、キリストと一体となって恐れを表明し、神の手に自身を委ねることだったといえるであろう。次の説教からの引用はこのことを集約的に表した究極の表現であろう。

so when my crosses have carried mee up to my Saviours Crosse, I put my hands into his hands, and hang upon his nailes, I put mine eyes upon his, and wash off all my former unchast looks, and receive a soveraign tincture, and a lively verdure, and a new life into my dead teares, from his teares. I put my mouth upon his mouth, and it is I that say, *My God, my God, why hast thou forsaken me?* and it is I that recover againe, and say, *Into thy hands, O Lord, I commend my spirit.* (II, 300)

このキリストの祈りの態度は、もちろん、ダンだけのことではなく、すべてのキリスト者の模範とするところであろう。キリストは人間を代表して祈っていたといえるのである。

When thy Son cried out upon the cross, *My God, my God, why hast thou forsaken me?* he spake not so much in his own person, as in the person of the church, and of his afflicted members, who in deep distresses might fear thy forsaking. (*Devotions*, Prayer 17; 90)

我々はダンの宗教的態度の最終的表現に達したように思われる。それはキリスト者としては当然の、当たり前 of 立場ともいえるであろう。が、キリストの祈りに恐れを読み取るまさにその一点において、キリスト者として当たり前 of 立場が、ダンの光を帯びたキリスト者の立場として浮かび上がってくるのである。

このダンの散文による宗教的態度の表明と、彼の宗教詩との関係はどのようになるのであろうか。ダンの晩年の3つの詩を分析することによって、前述した宗教的態度が表されているかどうかを検証

したい。

ダンの最晩年の詩は2つある。「病にあつてわが神への賛歌」(“Hymne to God, my God, in my Sickness”)と「父なる神への賛歌」(“A Hymne to God the Father”)であり、これらと*Devotions*は制作時期を同じにしているといわれている。<sup>4</sup> 前者「病にあつて」は病気をきっかけとし、*Devotions*とのパラレル関係が示唆されるが、「父なる神への賛歌」は罪を中心としており、構成上の違いは対照的である。これらの詩が1623年の病気後のものであるとすれば、それより4年前に、同じ「賛歌」という名を付した詩、「作者のドイツへの最後の旅立ちに際してのキリストへの賛歌」(“A Hymne to Christ, at the Authors last going into Germany”)がある。これは、ドンカスター子爵が大使としてヨーロッパに赴くとき、ダンがチャブレンとして随行しており、1619年という年代が確定している。若干時代が他の2つより早いだけあって、「聖なるソネット」の内容とも共通性が見られる。したがってまず年代順に「キリストへの賛歌」から考察する。

この詩が書かれたとされる1619年の3月グッディアア宛の書簡でこの時の心境についてダンはずきのように述べている。

Sir,—It is true that Mr. Gerrard told you, I had that commandment from the King signified to me by my Lord and am still under it, and we are within fourteen days of our time for going. I leave a scattered flock of wretched children, and I carry an infirm and valetudinary body, and I go into the mouth of such adversaries as I cannot blame for hating me, the Jesuits, and yet I go. Though this be no service to my Lord, yet I shall never come nearer doing him a service, nor do anything liker a service than this. (Gosse II, 121)

ここには肉体的な衰弱と、母を失った子供たちを残してゆく心配、さらに大陸においては、ダンはいエズス会批判者として知られており、敵地に向かうという意識もあったようである。<sup>5</sup> (Johnson 113) したがって「キリストへの賛歌」が表している状況は、この旅行はできれば避けたい「盃」であったろう。とりわけ死の可能性を覚悟しなければならないとなれば。

そこで詩は死を暗示する洪水のイメージで始まる。

In what torne ship soever I embarke,  
That ship shall be my embleme of thy Arke;  
What sea soever swallow mee, that flood  
Shall be to mee an embleme of thy blood; (1-4)

沈没してもおかしくないような船でも、それは神の「箱舟」、たまたもし沈没するのであれば、海はキリストの贖罪の血をあらわすものであることを願う。どちらも死を暗示しながら、しかし救いを含んでいるイメージである。ダンはドイツに向かう際、「別れの説教」とされる説教を行っている。そこでも海がキリストの血であるという共通のイメージが見られる。<sup>6</sup>

もし死ぬとすれば神によって最後の救いの判定がなされることになるだろう。それは罪を犯したものに罰をあたえる怒れる神なのか、慈悲の眼を持った神なのか。ダンは後者を、つまりキリストを想定する。

Though thou with clouds of anger do disguise  
Thy face; yet through that maske I know those eyes,  
Which, though they turne away sometimes, they never will despise. (5-7)

「別れの説教」においても怒りの雲の中に、光を見ることが語られ、最後の救いの希望が同じように語られている。

so even in this cloud of *Ite maledicti*, go ye accursed, we may see the day break, and discern beams of saving light, even in this Judgment of eternal darkness; if the contemplation of his Judgment brings us to remember him in that day, in the light and apprehension of his anger and correction. (II, 240)

ノアの箱舟はキリストの贖罪（血）の海に浮かび、旧約の怒れる神は、キリストの慈悲に変化する。ここにキリスト教の公的な救済の枠組みが示されているといえるであろう。

だからといって個人の救いの確信になるわけではない。詩人は第2スタンザで人間側のできることを示す。すなわちそれはこの世のすべてを犠牲にするという決意である。

I sacrifice this lland unto thee,  
And all whom I lov'd there, and who lov'd mee; (8-9)<sup>7</sup>

ここに示されているのは自らをすべて捨て、神に身をゆだねるという態度ではない。なぜならこの決意も次の交換条件的要請と引き換えであるからである。

When I have put our seas twixt them and mee,  
Put thou thy seas betwixt my sinnes and thee. (10-11)

ダンが愛するものと自分との間に「海」を置く、つまり愛するものと決別したのであるから、キリストはその贖罪の血の海を、人間の罪とキリスト自身の間におくようにという。アダムの原罪による罪はキリストの贖罪ですでに浄化されているはずであるから、ここで自分の罪とはその後個人が犯した罪ということになる。ということであればここには予定説とはことなる救いの立場が示されていることになる。

そういう血を流したキリストが「本当の愛の永遠の根」であるのであるが、それを木が冬に樹液を地に求めるように、ダンも自らの「冬」、晩年において、その根もとを確かめるにゆくというのである。<sup>8</sup> すべてと決別し、この世を成り立たせている根源を知ろうというのである。

As the trees sap doth seeke the root below  
In winter, in my winter now I goe,  
Where none but thee, th'Eternall root  
Of true Love I may know. (12-15)

このイメージは「聖ルーシーの日における夜想」を思い起こさせるであろう。「世界の全樹液が地に沈む」冬に、すべてを失って「無」となる詩人は死せる恋人の「方へと準備させてくれ」というように、そこでも死を意識した詩人の姿があった。<sup>9</sup> しかしもっと類似性を示しているのは「聖なるソネット」の「私が愛した人が最後の借りを自然に払ったので」(“Since she whom I loved, hath payd her last debt”)である。ここでは愛する人が死んだのでこの世で「よきことは死に」、「私の心は天のことにすっかり向かった」という。彼女を求めることは神を見出すことになるのである。

Here the admiring her my mind did whett  
To seeke thee God; so streames do shew the head… (5-6)

このソネットと「賛歌」との類似は第3スタンザにおいてとりわけ顕著となる。このスタンザでは、そういう神の愛とはどういう愛なのか人間的な愛のレベルをアナロジーとして語られる。<sup>10</sup> 「協和する魂の愛情深さ」をキリストは抑制するのではなく、むしろキリスト自身もそのような愛を持つとする。(15-17行)そして旧約の「妬む神」を妬むキリストとしてあらわす。

As thou  
Art jealous, Lord, so I am jealous now,  
Thou lov'st not, till from loving more, thou free  
My soule: Who ever gives, takes libertie:  
O, if thou car'st not whom I love, alas, thou lov'st not mee. (17-21)

「もっと愛すること」から「私」の魂が自由にならなければキリストが愛していないとは、キリストが自分以外を愛することを黙認することであり、すなわち「私」に関心がない、愛していないということであろう。愛を「与えるものは、自由を奪う」。<sup>11</sup> つまり愛を与えることにより他に向かわざ

るをえない愛着から解放はするが、しかし他を愛する自由は奪われることになる。この神の愛のパラドキシカルな性格をここでは極めて簡潔に表現する。

「私が愛した人が」では、愛の根源に神がいたのであるが、さらなる愛を求めさせていたのは神であったのである。

But though I have found thee, and thou my thirst hast fed,  
A holy thirsty dropsy melts me yett.

しかし神であるならばさらなる愛を求める必要があるだろうか。なぜなら彼女の魂の代わりに神が自分の魂すべてを差し出して、詩人の魂を求めているのであるから。

But why should I begg more Love, when as thou  
Dost woe my soule, for hers offering all thine:

神の魂を受け入れることは、その中には彼女の魂も含まれていることになる。神がそこまでするのは神がまだ恐れているからであるという。神と間違えてしまうようなもの、「聖者や天使」に向かう愛が残っているばかりでなく、この世のもの、いや悪魔さえまだ心においてキリストを排除しているのではないかという恐れが。

And dost not only feare least I allow  
My Love to Saints and Angels, things divine,  
But in thy tender jealousy dost doubt  
Least the World, fleshe, yea Devill putt thee out.

「私が愛した人が」では、愛の根源の神を見出したのに、人間の心にはまだ神へと愛を集中させていないことを、神の側が嫉妬しているという形で表現している。「賛歌」では、人間の側がすべてを捨てる決意をしたが、神の側がすべてを示してくれていないという状況である。もちろん「ソネット」では「どうしてさらなる愛を求めなければならないのか」という反語的な表現であり、それはむしろ神以外への愛を断ち切れていない詩人の姿が見えてくる。<sup>12</sup> だから「賛歌」は、断ち切ったという点で、神に向かって一歩すすんだことになる。このことは「私が愛した人が」では、愛を差し出す神が嫉妬し、「賛歌」では、犠牲を払った語り手のほうが嫉妬しているということもできるであろう。「ソネット」と「賛歌」はこのように対称形を成しているといえるのである。

さらに「賛歌」のこのスタンザが要請しているものが恩寵であることは説教との比較においても確認できよう。「私が愛した人が」において、さらなる愛を求めさせていたのは神であるが、それは神が恩寵を求めさせていたのである。ソネットの「聖なる乾き求める脱水症」とはこの説教に述べられることに他ならないだろう。

Grace is not grace to me, till it make me know that I have it. . . . So good as that he hath given that soule an appetite, and a holy hunger and thirst to take in more of him; for I have no Grace, till I would have more; and then . . . So good, as that he hath dilated and enlarged that soule, to take in as much of God as he will. (VIII, 250)<sup>13</sup>

第4スタンザで詩人の決別の表明が繰り返される。「すべてのものとの離婚」(“Divorce to All”)のキリストによる承認を求める。そうして地上的な「名声、機知、希望」に向けられた愛をキリストに集中するようキリストに要請する。最終的な完成はキリストに待つということである。

Seale then this bill of my Divorce to All,  
On whom those fainter beames of love did fall;  
Marry those loves, which in youth scattered bee  
On Fame, Wit, Hopes (false mistresses) to thee. (22-5)

最後の4行は世俗の関心を離れようとしている自分を見据えた表現である。詩人は神の見える場所、「永

遠の夜」を「選ん」だのである。その「夜」とは現実の死でなくとも、それをも含めた世界、つまり「嵐の昼」というこの世ではない世界を選び取ったということであろう。<sup>14</sup>

Churches are best for Prayer, that have least light:

To see God only, I goe out of sight:

And to scape stormy dayes, I chuse an Everlasting night. (26-8)

ダンにとって大陸に赴くことは、自分の状況を考えれば望ましいことではなかった。しかし避けられないものであるならば、それを契機とするほかはない。ダンは神に向き合わざるを得ない。その神は怒れる神かもしれないが、慈悲の神かもしれない。キリスト教の教えを信じるならばキリストの贖罪の血が自分と自分の罪を切り離してくれるはずである。それは教理としてすべての信者に語られたものである。しかしその救いの個別的な確信は、神の直接的な恩寵の実感しかありえないであろう。ダンは世俗への愛を断ち切ることにする。そのいわば交換条件として神が自分を愛していることを示す要請を行うことになる。しかし世俗への愛を断ち切れるように、心に働きかけるのもまた神の側である。すべては神に発するが、しかし人間がなす部分もあるというダンの神学的立場がここにもあらわれている。そして最後の行では、神への祈りが行動と一体化して、「永遠の夜」を選び取るという形になっているのである。「神を見るために、自分が姿を消す」という表現には、確かにすべてを投げ去るという人間側の全的な放棄と、それによってはじめて立ち現れる絶対的なもの、「永遠の夜」としか表現するしかないものと出会おうとするその瞬間を垣間見せているといえるであろう。これをサンダースの言葉を借りれば次のようになろう。

It is one of the rare moments in literature when one has some idea of what it might mean to 'behold God', confront the absolutely other, the non-, the anti-human, which is also supremely, and humanly, desired. (158)

この詩は、宗教詩として非常にクリティカルな瞬間を表現したものであり、極めてユニークなものであるとおもわれるが、しかし、キリストの祈りのように、まだ完全な信頼を表したものではない。<sup>15</sup> 神からの働きかけを待ちながら、しかし神に向かって一歩進んだ状態を表現したものである。ここには前進と恐れが同時に存在している。それこそダンの最終的立場との一貫性を保っているものである。

#### Works Cited

- Gardner, Helen, ed. *The Divine Poems*. 2nd ed. Oxford: Oxford UP, 1978.
- Gosse, Edmund. *The Life and Letters of John Donne*. 2 vols. Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1959.
- Johnson, Jeffrey. *The Theology of John Donne*. D.S. Brewer, 1999.
- Novarr, David. *The Disinterred Muse: Donne's Texts and Contexts*. Ithaca: Cornell UP, 1980.
- O'Connell, Patrick Francis. "Both Adams Met in Me": A Reading of the "Divine Poems" of John Donne. PhD dissertation. Yale U. 1978.
- Partridge, A. C. *John Donne: Language and Style*. London: Andre Deutsch, 1978.
- Ray, Robert H. *A John Donne Companion*. New York: Garland, 1990.
- Sanders, Wilbur. *John Donne's Poetry*. Cambridge: Cambridge UP, 1971.
- Stein, Arnold. *The House of Death: Messages from the English Renaissance*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1986.
- Stubbs, John. *John Donne: the Reformed Soul*. New York: W. W. Norton, 2006.

1 日本語訳聖書は『聖書』(新改訳)いのちのことば社, 1981、ウルガタ聖書からの引用は、*Biblia Sacra: Juxta Vulgatam Versionem*, Stuttgart: Wuerttembergische Bibelanstalt, 1969, Tomus II を用いた。

- 2 他の部分は II, 168 と IX, 359。
- 3 次の箇所のように「ルカによる福音書」に言及していない場合もある。  
Christ goes as far in the passion, in his agony, and he comes to a passionate deprecation, in his *Tristis anima*, and in the *Si possibile*, and in the *Transeat calix*. But as all these passions were sanctified in the roote, from which no bitter leafe, no crooked twig could spring, so they were instantly washed with his *Veruntamen*, a present and a full submitting of all to Gods pleasure, *Yet not my will O Father, but thine be done*. (IV, 328)
- 4 この詩の年代特定については議論の分かれるところであり、要は病気を1623年のものなのか、死の直前の1631年のものなのかということであろう。しかし詩の調子からいって、余裕が見られるところから、また *Devotions* との比喩の類似からいっても、1623年の病気のときのものであろう。
- 5 ダンは、1615年に外交文書に使う暗号を与えられ、大陸の宗教的指導者とも秘密裏に連絡を取っていた可能性もあった。そういう政治的、宗教的、個人的な状況がからまって、逡巡と同時に決着を望む気持ちがあったのであろうとスタップズ (Stubbs) はいう。(338-42)
- 6 "... though we must sail through a sea, it is the sea of his blood, where no soul suffers shipwrack..." (II, 249)
- 7 オCONNELL (O'Connell) によれば、前スタンザの最終語 "despise" と "sacrifice" は当時の発音では韻を踏むことになるという。(344) そうであるならば、キリストの側の対応と、人間側の対応がいっそう際立つことになる。
- 8 ガードナーの注に Kitty Datta のアウグスチヌスの説教への指摘が言及されている。そこでは極めて類似的なイメージが語られている。(157)
- 9 「聖ルーシー」では、「洪水」(22-7行) のイメージもまた死を予感させるものである。
- 10 神への愛を人間の愛の言葉で表現することについては説教の次の箇所を参照されたい。(Sermons I, 237; VII, 87)
- 11 この格言は「自由を与えるものが、自由を奪う」とも解釈できるであろう。オCONNELL はしたがって "God gives the soul liberty by taking away free will" と解釈し、"most extraordinary sophistry" であると、コメントしている。(348) Cf. Ray 167.
- 12 ノーヴァー (Novarr) も次のように言う。  
For all that she may have whetted his mind to seek God, it is she who represents his joys, his good in this world. God's love seems an insufficient replacement for her love, and Donne feels the pull of fleshly desire, of affection for the things of this world, of sin rather than virtue. The idea is very close to one which Donne explored in several of the Holy Sonnets: there, Donne's sense of his own unworthiness is so great that he insists God must make a peculiarly strenuous effort to save him; here, Donne has already found God, and God has, indeed, fed his thirst, but he still remains subject to temptation, and God must work still harder. (125)
- 13 スタインの引用による。(Stein 288) スタインはさらに恩寵の「充足」("satiety") を求めることについて説教の別の場所 (V, 275) をも指摘している。
- 14 「賛歌」が「聖なるソネット」で表現されたものより、異なる心境を表現したことは、「愛する人が」で示された対称形でも看取されるが、さらに別のソネットを挙げると、たとえば「多くの権利によって当然のこととして」("As due by many titles I resigne") には、「選ぶ」側の対比が明らかである。(Except thou rise and for thine owne worke fight, / Oh I shall soone despaire, when I doe see / That thou lov'st mankind well, yet wilt'not chuse me.) (11-3)
- 15 ジョンソンは次のように言って、ダンのキリストへの委ねを読み取っているが、この詩はまだ、説教や *Devotions* であらわされたもの、つまりキリストの祈りそのものの段階には達していないようにおもわれる。Donne responds to Christ throughout this hymn by saying that he is jealous for the one who was first jealous for him. Donne is not so much giving up the world as he is giving in, and giving himself over, to Christ. (113)